

「やあっ！ あうっ！」

続いて胸、そして太股の辺りに同じような衝撃。

そのとき、なのはは初めていまの自分の姿に気がついた。裸だったのだ。

「ぎゃああああああっ！」

身体を二つに切り裂かれたかのような激痛と、自らがあげた苦悶の叫びに、なのはの意識は一瞬にして覚醒した。

「うう……あ」

左肩から腰にかけて、火傷のような痛みを感じてなのはが顔を歪める。

「こゝ、は」

視界に入るのは、一面の闇。

屋外なのか室内なのか、昼なのか夜なのかもわからない。

臉はたしかに開いている。が、目に映るのはどこまで続いているのかもわからない漆黒の空間だけだった。

「わたし……いったい」

自分がなぜこんな場所にいるのか、記憶が混乱してはつきりと思いつけない。

と、背中に冷えたコンクリートのような感触を覚えて、なのは振り返ろうとした。

「え……？ なに、これ」

が、首はわずかに左右に動かせるのみで、背後になにがあるのか見ることができない。

どうやらなにか首輪のようなものをはめられているようだが、触ってたしかめようにも、両腕は左右に開かれた状態で手首を固められていた。

脚も同じように足首のあたりに枷のようなものがあり、動かすことができない。

「これ……バインド？」

わずかに魔力の熱を感じることから、おそらくは魔法で壁のようなものに全身を固定されてしまっているようだった。

「なんで、こんな、わたし」

必死に記憶の糸を辿る。

たしか、闇の書の残滓、と呼ばれる闇の書の破片が、自らの再生のために闇の欠片というなのはやフェイトを模した存在を生み出して活動している、という連絡がアースラからあった。

それを受けて、自分やフェイトをはじめとするアースラタッフ、それに八神家の面々などもそれを破壊するために探索を始めたところまでは覚えている。

「そうだ、それでわたし、たしか誰かに、襲われて」

戦いになって、とそこまで思い出したとき、視界の隅でなにかが動いたように見えた。

その瞬間だった。

「ぎゃあああっ！」

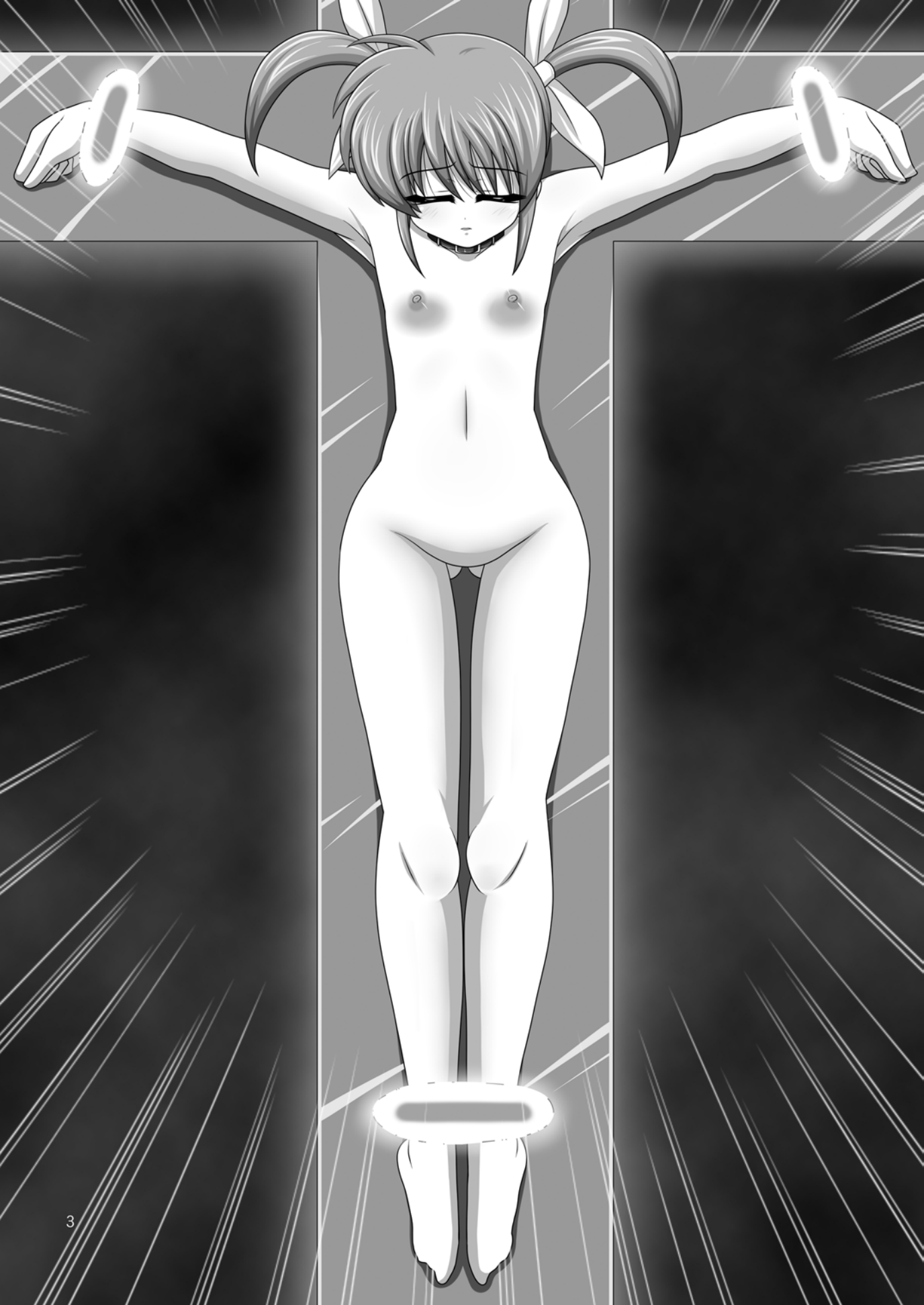
再び腹部のあたりを横に裂かれたような、鋭い痛みが走ってなのはが悲鳴をあげる。

「やあっ！ あうっ！」

続いて胸、そして太股の辺りに同じような衝撃。

そのとき、なのはは初めていまの自分の姿に気がついた。裸だったのだ。

「え、わ、わたし!？」



レヴィの振るう鞭が、身動きのとれないなのはの全身に襲いかかる。
「きゃああっ！ ああっ！ い、いたい！ あう！ ひいっ！ あああっ！」
「ほら！ もっと泣きなよ！ 叫びなよ！ ほら！ ほら！」

慌てて身体を隠そうとするが、やはり手も足も動かすことができない。

「どうし、て……なに、が」

生まれたままの姿を無防備にさらけだす、その羞恥なのはの顔が赤くなる。

「ああ、やっと目が覚めてきたみたいだね」

と、不意に聞き覚えのある声がなのはの耳に響いた。

「フェイトちゃん!?」

けして聞き間違えるはずがないと、そうなのはが信じたその声の主は、だがあざ笑うように答える。

「さーんねん。はずれ、だよ」

と同時に、またしてもなのはの身体を貫くような痛みが襲った。

「やああああああっ！」

「あはは、だらしないなあ。さつきからきやあきやあ喚いちゃって」

違う、フェイトちゃんじゃない、となのはは顔をあげた。

フェイトちゃんの声は、もっと優しく、聞いているだけで安心できるような暖かさがある。

だが、いま自分が耳にしているその声は、まるで氷のように冷たく、そして突き刺すように鋭かった。

「だ……れ」

ようやく暗闇に慣れてきたなのはの瞳に、おぼろげながら少女の姿が映る。

その少女はゆつくりとなのはに歩み寄ると、手を伸ばしてなのはの顔を荒々しく掴んだ。

「あなた、は」

「ボクはレヴィ。雷刃の襲撃者——レヴィ・ザ・スラッシャーと呼ばれてる。カッコイイでしょ」

「レヴィ……」

「そ、でも、仇であるキミにそう呼ばれても、全然、嬉しくないね！」

レヴィが手を振りかざす。

「ひいひいっ！ あうっ！」

なのはの身体を痛めつけていたもの、それはレヴィが手にした鞭だった。

「王様の仇！ シュテるんの仇！」

レヴィの振るう鞭が、身動きのとれないなのはの全身に襲いかかる。

「きゃああああああっ！ ああっ！ い、いたい！ あう！」

ひいっ！ ああああっ！」

「ほら！ もっと泣きなよ！ 叫びなよ！ ほら！ ほら！」

「いたい、やめ、ああ！ ひ、あああ！ うあ！ あ、やああああああっ！」

「あはははは！ 痛い？ 痛いよね！ あはははははははははははははは！」

休む間もなく打ち据えられ、なのはが悲鳴をあげるたびに、レヴィは楽しくて仕方ないと言った様子で笑い声をあげる。

「ぎゃあああああああああっ！」

十字架から蒼色の雷光が舞うように飛び散り、なのはの身体を包んだのだ。

「ひiiiiiiiiいっ！ あぐううううう！」

大きくしなつた鞭の先端が、正確になのはの股間、その中央のスリットを叩いた。

「ひいあああああああああああああああああああああ
あああああああっ！」

身体を芯から左右に引きちぎられたような、これまでに経験したことのないような激痛がなのはの脳を貫き、

「あ、ああ……あ」

なのはの首が、力が抜けたように、がくん、と垂れる。

「あれ、気絶しちゃったの？ だらしないなあ」

その様子を見て、レヴィはようやく少し満足したかのように薄笑いを浮かべた。

「まあいいか。キミにはまだまだ頑張ってもらわないといけないし」

持っていた鞭を投げ捨てると、レヴィは右手を高く掲げ、呟くように言った。

「……雷纏」

闇のなかに、ライトブルーの雷光が奔る。

その光がレヴィの手の内に収束するように吸い込まれると、紫紺色の切っ先を持つ一本の鎌が出現した。

レヴィの身の丈ほどもあるうかというその鎌は、レヴィの愛機、バルニフィカスである。

「さて、と」

バルニフィカスの先端で、なのはの顎を軽く押し上げて、レヴィは笑った。

「まずは、もつともつと痛めつけてあげるよ。抵抗できないくらい、念入りに……ね」

闇のなかに、空色の魔力光が浮かび上がる。

なのはの頭上で魔法陣の形を為したその光は、レヴィが短く呪文を詠唱すると、なのはの身体を磔にしている十字架へと吸い込まれていった。

「これでよし、と」

レヴィがバルニフィカスを構える。

「さて、そろそろ目を覚ましてもらおうかな」

身体の正面にバルニフィカスをかかげ、レヴィが魔力を注ぎ込む。

と、バルニフィカスの刃がうつすらと輝きを帯びた、その瞬間だった。

「ぎゃあああああああああっ！」

背の十字架から蒼色の雷光が舞うように飛び散り、なのはの身体を包んだのだ。

「ひiiiiiiiiいっ！ あぐうううううう！」

喉が裂けるのではないかというほどの絶叫をあげ、背骨が折れんばかりの勢いでなのはの身体がのけ反る。

「どう？ ボクの電撃の味は」

「ぎiiiiiiiiい！ ひ、うあああああっ！」

レヴィの問いかけに答えることもなく、いや、そもそも聞こえているのかも怪しいといった様子で、なのはは苦痛の叫

